

COPMニュース 第23号

(過去のニュースは<http://www.npota.com/>精神科作業療法の中にあります)

発行日：2011.9.12 発行者：吉川ひろみ

県立広島大学保健福祉学部 〒723-0053 三原市学園町1-1

TEL 0848-60-1236 FAX 0848-60-1134 E-mail yosikawa@pu-hiroshima.ac.jp

9月24日と25日、県立広島大学 三原キャンパスで、第15回作業科学セミナーが開催されます。抄録集も完成しました。

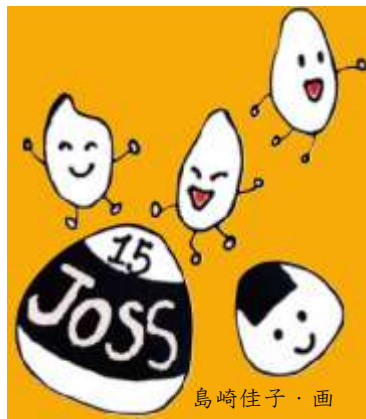
http://www.jssso.jp/courses_seminars.html

ご飯粒一つ一つが活動で、集まって意味をもつのが作業だというイメージをイラストにしました。

24日は近藤敏さんが「我作業する、ゆえに我あり」という講演をします。

25日は、元平和学会会長の岡本三

夫さん、作業剥奪研究で有名なゲイル・ホワイトフォードさんの講演があります。作業の捉え方について学び合うセミナーです。



6月24～26日、大宮市で開催された第45回日本作業療法学会で、「続・作業療法の視点：作業を通しての健康と公正」(大学教育出版)の編著者のお一人、エリザベス・タウンゼントさんの講演がありました。1993年のカナダ作業療法学会で、タウンゼントさんが「作業療法の社会的理想 (social vision)」というテーマで講演してから約20年、将来に向かって描かれた大きな絵が確実に彩りを備え、具体的に現実的になっている感じがしました。タウンゼントさんは、オーストラリアのアン・ウィルコックさんと出会い「作業的公正 (occupational justice)」という概念を発展させてきました。

「私たちが望む理想的な社会とは、どんなものだろう」という問いは、学者や政治家に限らず、全ての人が考える価値のある問いです。そして多くの人が目指す方向が justice

です。ところが justice には、唯一の容易に理解できる定義はありません。簡単に説明できないほど深く複雑な概念なのです。日本語では「正義」と訳されることが多いようですが、私は医療倫理の本の中で justice の概念に出会ったので、差別をしないと、平等な配分という意味を強く感じ「公正」と訳しています。裁判所は court of justice と表現され、天秤の絵がシンボルになっています。罪を裁く時に、適切な量刑を判断するということを示しているのでしょう。Just は丁度という意味です。多すぎても少なすぎても just ではありません。作業的公正とは作業的に丁度よい世界 (occupationally just world) なのです。

2010年のタウンゼントさんの著書「Introduction to Occupation: the Art and Science of Living 2nd ed」(Upper Saddle River)の第13章が occupational justice です (pp.329-358)。そこには justice の多様な見解についてのまとめがあり、分配の justice (偏りなく公平に分配されるか)、手続きの justice (当該関係者全ての意見が反映されるよう適正な手順で行われたか)、違いの justice (同等の分配や同等の機会を与えるのではなく、特定の個人や状況の多様性を基盤に丁度よさを考える) などが紹介されています。さらに、アマルティア・センとマーサ・ヌスバウムが提唱する「潜在能力 (capability) アプローチ」という考えが作業的公正の実現に役立つだろうと述べています。インド出身のセンとアメリカ人のヌスバウムは経済学者ですが、格差や貧困を乗り越える社会に向けた提案をしています。

「続・作業療法の視点」の翻訳を終えて、著者のタウンゼントさんとポラタイコさんに序文を依頼すると、センの引用から始まる文章が送られてきました。それからセンの考えが書かれた日本語の本を何冊か見ましたが、難解でした。しかし、湯浅誠が「反貧困」(岩

波新書)で、センの言う潜在能力というのは、溜め池の「溜め」のようなものだと書いていて、少しわかったような気がしました。溜め(周囲の支援, 社会制度, 精神的余裕など)があれば, 少々落ち込んでも, お金に困っても, 何とか生き続けていくことができます。この「溜め, capability」は, 個人の資質や努力により生まれるというよりも, いつの時代のどこに生まれたかで決まることが多いのです。だから個人の自己責任だけで増やすことはできないのです。「溜め, capability」がたくさんあれば, 大勢の人が, 働いたり, 楽しんだり, 休息したりできる作業的に丁度よい(作業的公正が実現した)世界になるでしょう。作業療法士も, 「溜め, capability」を増やすために何が必要かを見定め, それを充足するための仕事を行うことができます。

今回の講演でタウンゼントさんは, 「タウンゼントはいつもあんなことばかり言っているが, 到底実現しない」と言われていると話していました。そして作業的公正は到達する目標点ではなく, 目指す方向性なのだと言いました。完全に作業的公正が実現することはないかもしれないけれど, 少しでも今より作業的公正に近づくような行動を起こすことは, 今から, 誰でもできると思います。

2009年度の3年生の授業の課題として作成されたショートムービーが, YouTubeに出ていました。7分半くらいのところからCOPMが始まります。「作業療法ってなんだろう」で検索してみてください。

7月2日に東京国際フォーラムで開催された第7回脳性麻痺ボツリヌス研究会の研修会で「COPMとAMPSの概説」を話しました。オーストラリアの医師たちが, COPMやGASを使って, ボツリヌス療法の効果を示しています。治療の効果を, 何が満足できるレベルまでできるようになったかで測定しようという意気込みが伝わってきます。治療効果をクライアントの生活上の変化としてクライアントが決めるという路線に, 治療者たちの意識が集まって来つつある今, 作業療法の出番だと声をあげましょう。

この研修会に参加した医師の勧めでAMPS講習会を受講した人がいました。別の医師は自分の職場の作業療法士にCOPMをするよう依頼しました。被災地支援をしている医師が避難所でAMPSをしたらどうかと質問したので, まずCOPMがよいだろうと答えました。「どんな作業をしたら, 生活がもっとよくなるだろう」ここから始まる医療や支援が広がることを望みます。

8月28日に開催された石川県作業療法学会で講演された葉山靖明さんから講演原稿をいただきました。「過去の作業は思い出, 未来の作業は夢」という言葉にしばれました。現在の作業は自分なのかなと思います。自分のしていることが自分らしいと思える, 自分のしていることに満足できる, ということが作業的公正を示しているのかもしれない。

昨夜テレビで見たDASH村の光景は, 原発事故による作業剥奪を映し出していました。DASH村の農業指導者のアキオさんは, 現在マンションの一室に住み「食べて寝てるだけじゃあ・・・」と言っていました。そして最近友人から土地を借り, 種を蒔いたそうです。自分ではどうにもならない理由で, 意味のある作業ができない現実を前に, できることを考えてやってみる, それが必要で, 大事だと思います。

先日AMPS講習会受講生から, 60代の男性の話を受けてもらいました。仕事一筋で生きてきた方で, 脳梗塞右片麻痺となり, 身体機能の治療ばかりを受けてきたそうです。「期限がくるまでは機能訓練をしたい」「右腕が動くように」と言っていたそうですが, 作業療法士が作業について話すと, これまで身体の機能しかみていなかったことを悔しく思われたようで, その場で号泣されたそうです。そして「もう仕事は無理だろうけど, これまでできなかった庭での園芸がしたい」ということになり, OT室のプランターでトマトの植え替えを行い, 退院してからも, 自分で育てたトマトやきゅうりを見せに来られるそうです。作業の力を実感するお話でした。